

看護学生の学習実態と成績との関連 － 入学前教育のあり方に関する考察 －

The learning reality of the nursing student and the relation with the results
－ Consideration about the state of the education before entrance －

嶋 崎 昌 子
Masako SHIMAZAKI

要旨

【目的】 本学看護学科学生の学習実態と、成績との関連を分析する。【方法】 平成 28・29 年度入学生のうち、研究期間内在籍していた学生を対象とする。学習実態として家での勉強時間、宿題・課題の実施状況、テスト勉強の開始時期、勉強方法の傾向、家での勉強の様子およびテレビ視聴時間を質問紙にて調査した。【結果と考察】 勉強の仕方では①テキストを繰り返し読む、アンダーラインやカラーマーカーを引く⑦プリントや問題集を繰り返しやる、が多く、③参考書を読む④辞書を引く⑤図鑑や事典で調べる、が少ないことが分かった。学習タイプでは「試験の前にまとめて勉強する」、「できるだけ暗記しようとする」、「復習中心」、「優しい問題を数多く解く」、「わからないところは先生や友達に聞く」タイプが多いことが分かった。平日の勉強時間よりテレビ視聴時間の方が長く、平日の勉強時間のほとんどが宿題や課題を行うことに使われている、という実態であった。全体としては高校までの学習方法が継続されており、成績向上に結びついていない実態が明らかになった。入学後は、「講義のポイントをまとめる力」、「ノートの取り方」、「意見と事実を分けて書く力」などをつけるための支援が必要であるとの示唆を得た。

【キーワード】 学習実態 入学前教育 学力低下

I はじめに

平成 21 年春 4 年制大学の進学率が 50%を超え、進む少子化と相まって大学の全入時代へ突入した。中でも平成 26 年度には大学の 3.3 校に 1 校は看護学科を設置する“スーパー看護ラッシュ”¹⁾の時期を経て、平成 27 年度の 4 年制大学看護学科入学定員は 20,000 名を超え²⁾、質・量ともに高い看護基礎教育が求められる時代となった。一方でいわゆるゆとり教育の弊害として、学習時間の減少や子供の学力低下が問題視された。耳塚らの 2006 年の調査によると「小・中・高校生の中で、高校生がもっとも学習時間の少ない集団」であり、「少子化と大学受験プレッシャーの低下した『脱受験競争』の時代に、高校生を学習へと動機づけることの困難さ」³⁾が課題とされた。同時に多様化する入試様式により、新入生の学習履歴は多様化し、学力差も拡大している⁴⁾と言われる。本学看護学科においても、看護学や関連科目履修に必要な知識である生物・化学を高校で履修しないまま入学する学生が一定数を占めるようになった。このような背景から大学入学前教育や初年次教育の必要性が高まってきた。一方で 2015 年の調査によると「中・高校生とともに、2006 年よりも家庭学習の日数が増加して」⁵⁾おり、寺崎は「学習への回帰をもたらした一つの要因に、学校の取り組みが考えられる」⁶⁾と述べている。

教育現場では様々な工夫が行われ、一定の成果を上げていることがうかがえる。

当学科においては入学前の課題として、読書感想文、生物や数学の問題へのチャレンジなどを勧めてきた。また平成 26 年入学生からは入学前教育教材を採用し、入学後の学習へつながらようサポートを充実させた。しかし、入学後学習についていけず、早い段階で進路変更する学生が後を絶たない。成績が伸び悩む学生と面接していると、「いままで宿題なんてやったことはない」、「毎日勉強するなんてありえない」、「今まではテスト勉強だけすれば、何とかかなった」という学生も多い。入学後、量・質ともにそれまでの経験を超えた学習を求められ、学生は混乱しているのかもしれないと考えた。そこで、まず現在の学生の学習実態を把握する必要があると考え、学習実態や勉強方法の特徴と入学後の学力との関係を明らかにするため本研究を実施した。

II. 看護学科における学習サポートの概要

1) 入学前

特別推薦入試、一般推薦入試、社会人入試で合格した学生を対象に行っている。月に 1 回登校し「入学前教育教材」(旺文社)の日本語、数学のテキストをもとに、毎日学習する習慣をつけること、文章を読みこなす訓練の重要性を説明した。毎回実施す

るテスト(前出の教材から出題)で成績不振の者に対しては、学習状況や困っていること、不安に思うことなど個別相談に応じた。

2) 入学後(1年次)

入学直後に日本語と数学の基礎学力判定テストを実施。その後は月に1回学力テストを実施している。科目は数学と基礎科目(主に人体構造機能学)の2科目である。数学は国家試験によく出る計算問題とその基礎となる計算問題を30分程度で解答できる問題数にして出題している。問題作成、採点、結果分析は外部非常勤講師に依頼した。28年度はすべての学生を対象に講義形式で問題の解説を行っていた。しかし、100点から20点以下まで点差の開きがあり能力差が大きく講義のポイントが絞りにくいこと、低学力群には優しい問題を繰り返し解き、解説する必要があることなどを考え、サポート方法を変更した。29年度からは補講対象を平均点の70%以下の低学力群の学生に絞り、少人数でのグループワーク形式で補修講義を実施した。

一方基礎科目(主に人体構造機能学)は国家試験と同様の択一式で出題、問題数は30分程度で解答できるよう30~40問程度としている。試験実施後、問題の解説作りを課し、課題ノートとしての提出を求めた。問題の作成、採点、結果分析、課題ノートの提出確認、点検、コメントを入れたうえでの返却は、専任教員が担っている。また課題ノートの作成が困難な学生を対象に、学習方法やノートの作り方について説明会を複数回行った。著しい成績不振の学生については、チューターからの指導を依頼することもあった。

II. 目的

学生の学習実態と1年前期の専門基礎科目のうち特に学生が苦手としている人体構造機能学の成績(以下人体)および入学後の学習支援として実施している学力テストの成績との関連を分析する。

III. 用語の定義

本研究で用いている「学習」と「勉強」について、以下のように定義する。「学習」は看護学に関連する知識・技術・態度を系統的に学ぶ過程やその方法、成果を含むものとする。一方「勉強」は看護学科の教育課程を履修するために学生が努力して行う学習活動の行為を指す。

IV. 方法

1 研究デザイン

量的研究、因子探索的研究

2 研究対象者

平成28~29年度入学生で、研究期間内在籍中であり、研究への同意が得られた者

3 研究期間

平成29年4月~12月

4 研究内容

分析に用いた項目は①基本的属性として性別、年齢、②看護職への志向として看護職に興味関心を持った時期と現在の就業意欲、③学習実態として、家での勉強時間、宿題・課題の実施状況、テスト勉強の開始時期、勉強方法の傾向、家での勉強の様子およびテレビ視聴時間(スマホでの動画視聴を含む)を質問紙にて調査した。学力の指標は、1年前期に実施した人体構造機能学の学力テスト(以下学力テスト)の成績、および人体構造機能学の前期成績(以下人体)とした。

5 分析方法

平成29年度在籍していた学生116名のうち、同意が得られ欠損値のないデータ97名のデータを分析した。表計算ソフトExcelを用いてデータをセットし、集計を行った。分析は χ^2 検定および5以下の数値がある場合はフィッシャー正確確率検定を行った。

6 倫理的配慮

本研究は、松本短期大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号17-3)。研究目的、方法を説明するとともに、全て単位認定の終了した科目の成績を使用すること、連結可能符号化すること、参加は自由意志であること、参加の有無による個人の利益・不利益はないことを口頭および説明文で対象者に説明した。調査用紙の提出をもって同意を得られたものとした。

IV. 結果

対象者の年齢は18~34歳で平均年齢は20.4歳、性別は女性78名、男性19名であった。

1. 看護職への興味・関心・意欲

看護職に興味を持った時期は、小学生が最も多く26名(26.8%)、次いで高校2年が14名(14.4%)、中学2年10名(10.3%)であった。その他の18名の中には、社会人経験や他領域への進学後の進路変更の者が含まれている。また現在看護職として働きたいという意欲は、91.7%の学生が「強い」、「まずまず強い」と答えていた。

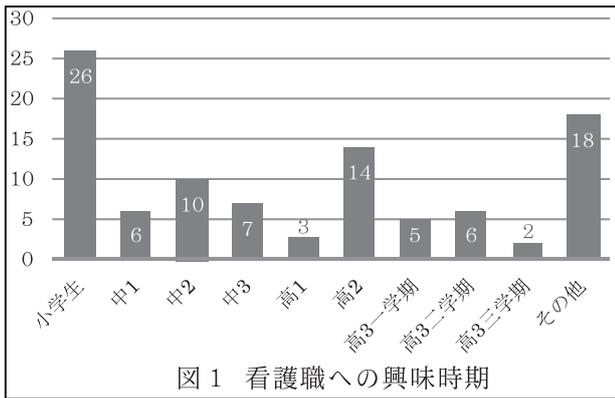


図1 看護職への興味時期

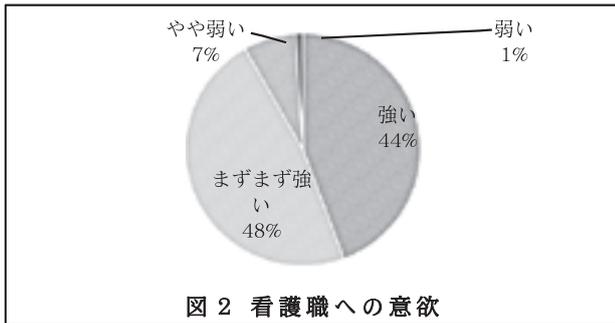


図2 看護職への意欲

2. 家での学習状況

1) 家で学習する頻度について尋ねると、毎日～週に半分以上学習する学生が36名(37.1%)、週に半分以下～1日の学生が52名(53.6%)であった。入学前との変化について聞くと、72名(74.2%)の学生が「入学前より増加している」と回答した。

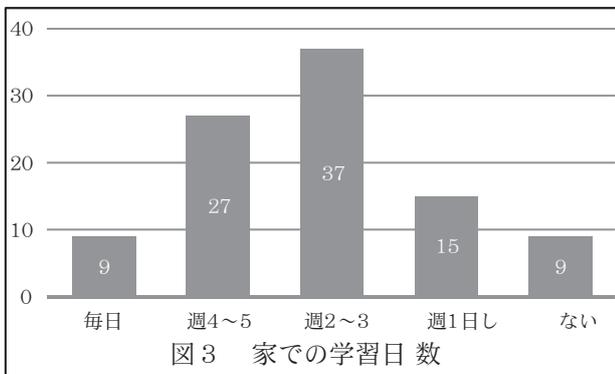


図3 家での学習日数

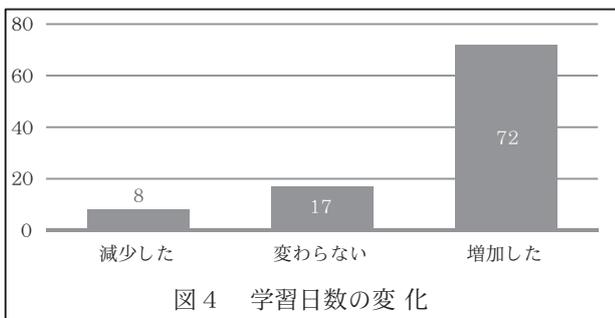


図4 学習日数の変化

2) 学校から出される宿題・課題の状況ではプリントや問題集、調べ学習やレポート、講義ノートの見直しは行う学生が多いのに対し、作文や小論文は「ほとんどしない」と回答した学生が半数を超えている。この結果から、当学科においては作文や小論

文を宿題として出されることはほとんどないことがわかる。

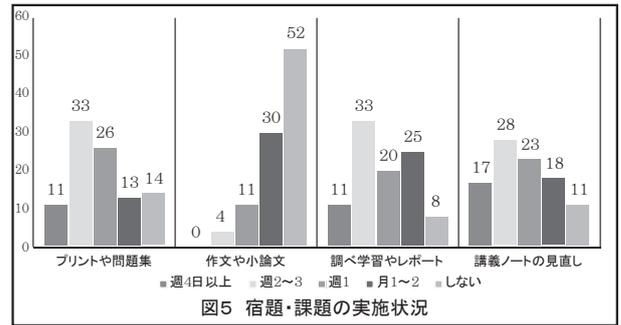


図5 宿題・課題の実施状況

3) テスト勉強開始時期は2週間前からが最も多く35名(36.1%)、次いで1週間前からが21名(21.6%)となった。テスト勉強を開始する時期は入学前より早くなったと回答した学生が65名(67.0%)であった。 χ^2 検定の結果、テスト勉強を開始する時期と人体および学力テストの成績との間には有意な差は見られなかった。(人体： $\chi^2=1.15$, $p=0.143$, 学力テスト： $\chi^2=0.64$, $p=0.42$)

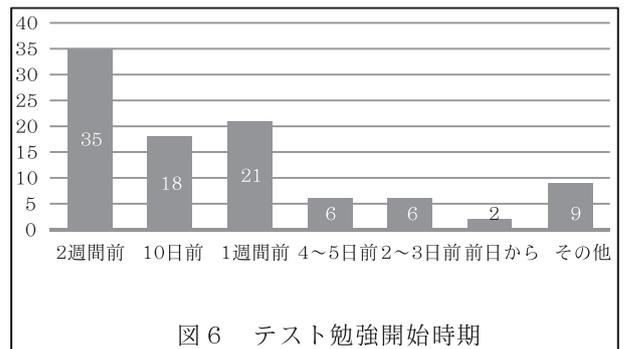


図6 テスト勉強開始時期

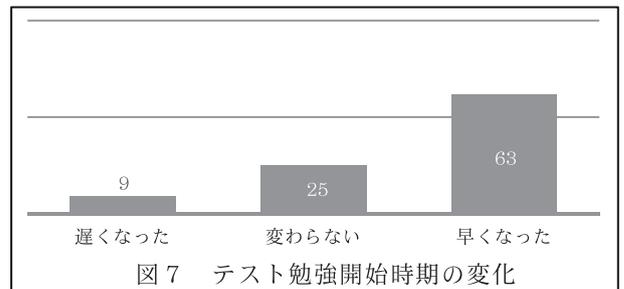


図7 テスト勉強開始時期の変化

表1 テスト勉強開始時期と成績

		テスト勉強開始時期		
		早い(10日前～)	遅い(～1週間前)	有意差
人体	高い(平均点以上)	22	12	n.s.
	低い(平均点未満)	31	32	n.s.
学力テスト	高い(平均点以上)	21	21	n.s.
	低い(平均点未満)	32	23	n.s.

4) 家での勉強の仕方について

「よくする」、「時々する」の割合が多かったのは、
 ①教科書やテキストを繰り返し読む、②教科書や参考書にアンダーラインやカラーマーカーを引く、⑥教科書や参考書を整理して自分のノートを作る、⑦

プリントや問題集を繰り返しやる、であった。逆に「あまりしない」、「ほとんどしない」が多かったのは、③参考書を読む、④辞書を引く、⑤図鑑や事典で調べるであった。またこれらの勉強方法が入学後変化したと回答した学生は66名(68.0%)であった。

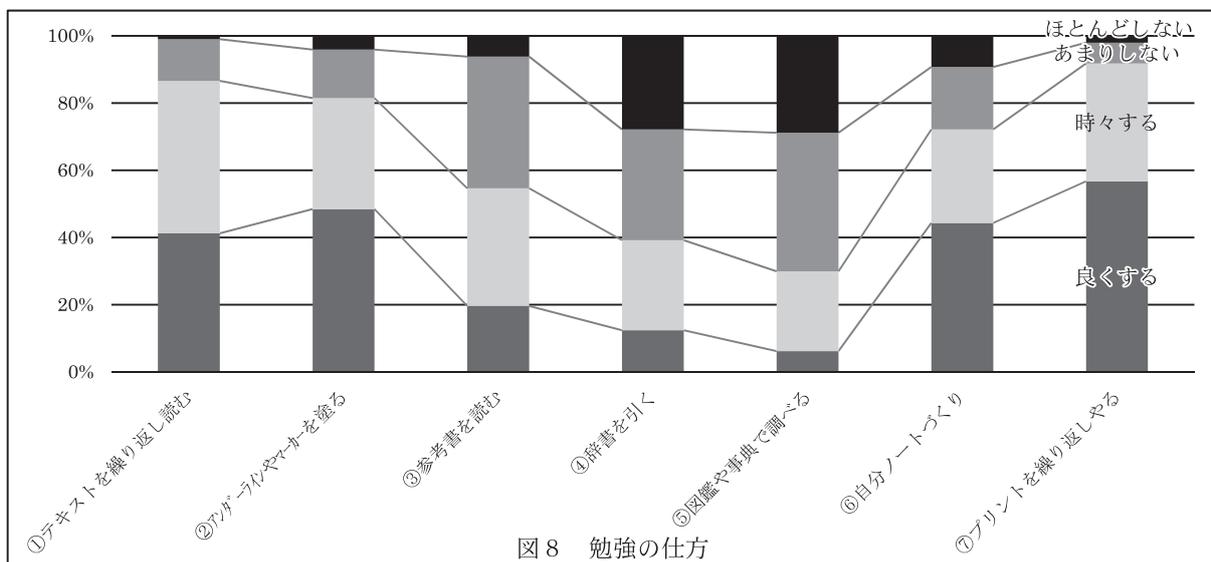


図8 勉強の仕方

表2 勉強の仕方と成績の関連

		人体			学力テスト		
		高い	低い	有意差	高い	低い	有意差
①テキストを繰り返し読む	する	29	55	n.s.	38	46	n.s.
	しない	5	8		5	8	
②アンダーラインやマーカーを引く	する	25	54	n.s.	33	46	n.s.
	しない	9	9		9	9	
③参考書を読む	する	19	34	n.s.	26	27	n.s.
	しない	15	29		16	28	
④辞書を引く	する	12	26	n.s.	17	21	n.s.
	しない	22	37		25	34	
⑤図鑑や事典で調べる	する	12	17	n.s.	16	13	n.s.
	しない	22	46		26	42	
⑥ノート作り	する	26	44	n.s.	26	44	※2
	しない	8	19		16	11	
⑦プリントを繰り返し	する	33	56	※1	40	49	※1
	しない	1	7	n.s.	2	6	n.s.

※1 フィッシャー正確確率検定 ※2 p<0 .05

た。検定の結果、⑥教科書や参考書を整理して自分のノートを作ると学力テストには有意な差がみられたが ($\chi^2=3.881$, $p=0.0488$)、それ以外の勉強の仕方と、人体および学力テストの成績には有意差はなかった。

5) 勉強方法のタイプで多かったのは、「試験前にまとめて勉強する」、「学校で使う教材中心」、「できるだけ暗記しようとする」、「復習中心」、「易しい問題を数多く解く」、「わからないところは先生や友達に聞く」であった。特に多かったのは、「学校で使

う教材中心」(94.8%)と「復習中心」(99.0%)であった。この2つを除いた4タイプと人体の成績では、「毎日コツコツ勉強する」と「試験の前にまとめて勉強する」の間に有意差があった ($\chi^2=6.10469$, $p=0.01348$)。学力テストの成績では、「毎日コツコツ勉強する」と「試験の前にまとめて勉強する」($\chi^2=5.89954$, $p=0.01514$) および「わからないところは先生や友達に聞く」と「わからないところは自分で考える」($\chi^2=8.42612$, $p=0.0037$) で有意差があった。

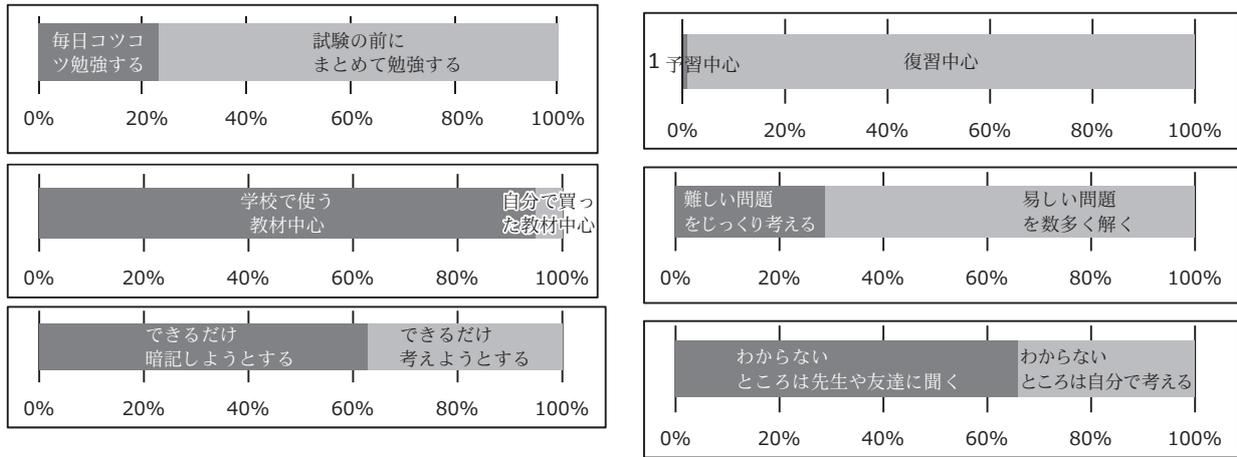


図9 学習タイプ

表3 学習タイプと成績の関連

	人体			学力テスト		
	高い	低い	有意差	高い	低い	有意差
毎日コツコツ勉強する	13	10	*	15	8	*
試験の前にまとめて勉強する	21	53		27	47	
できるだけ暗記しようとする	18	43	n.s.	23	38	n.s.
できるだけ考えようとする	16	20		19	17	
難しい問題をじっくり考える	12	16	n.s.	13	15	n.s.
易しい問題を数多く解く	22	47		29	40	
わからないところは先生や友達に聞く	20	44	n.s.	21	43	**
わからないところは自分で考える	14	19		21	12	

* p<0.05 ** p<0.01

6) 家での勉強の様子では、①出された宿題をきちんとやっていくに対しては、「あてはまらない」と回答した学生はいなかった。「あてはまる」の回答が多かったのは、④家族に言われなくても自分から進んで勉強する (61名、62.9%)、⑭自分で興味を持ったことを学校の勉強に関係なく調べる (57名、58.8%)、⑫スマートフォンを手元に置いたまま勉強する (44名、45.4%) であった。逆に「あて

はまらない」の回答が多かったのは、⑮勉強は学校だけですればいいと思う (85名、87.6%)、⑤予習をしてから授業を受ける (62名 63.9%)、⑯携帯電話やスマートフォンが気になって勉強に集中できない (55名、56.7%)、であった。

「あてはまらない」の回答のなかった①以外の14項目のうち、「あてはまる」、「まああてはまる」と「あてはまらない」の2群に分け検定を行った。人

体の成績では⑫スマートフォンを手元に置いたまま勉強するで有意差があった（フィッシャーの正確確率検定, $p=0.0084$ ）が、それ以外の項目では有意な

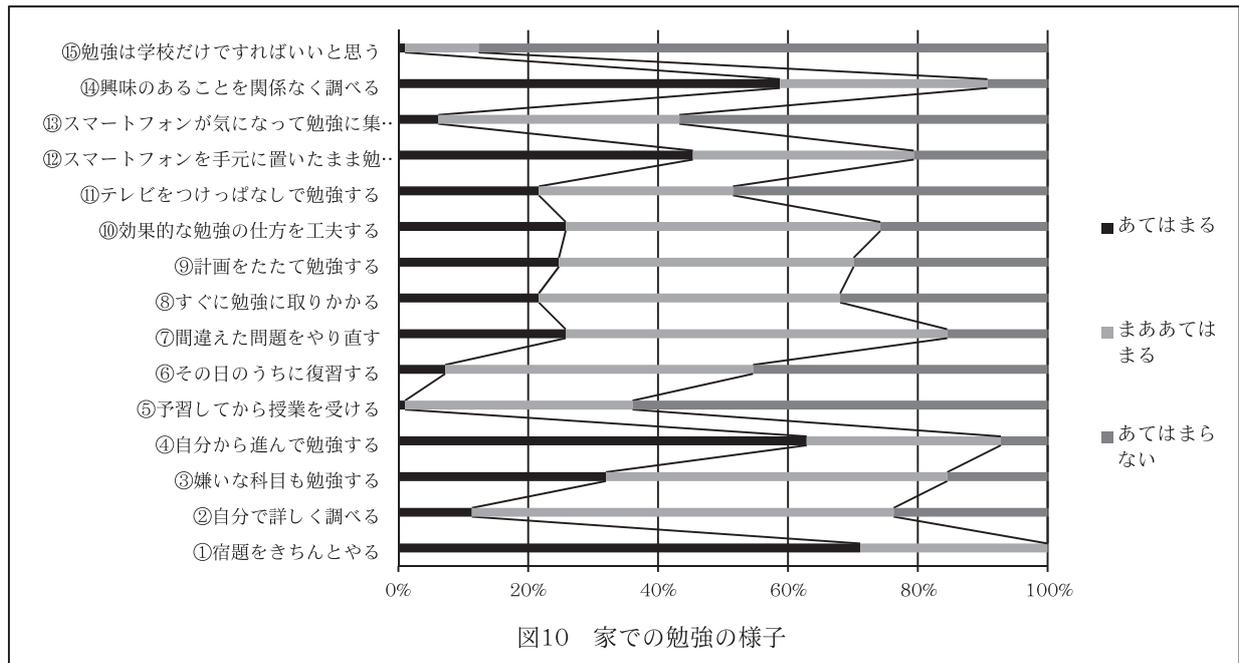
差はなかった。また学力テストの成績では、⑪のラジオやテレビをつけっぱなしで勉強するで有意な差があった（ $\chi^2=4.81312$, $p=0.02824$ ）。

表4 家で勉強の様子と成績の関連

		人体			学力テスト		
		高い	低い	有意差	高い	低い	有意差
①出された宿題をきちんとやっていく	あてはまる	34	63		42	55	
	あてはまらない	0	0		0	0	
②授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる	あてはまる	27	47	n.s.	34	40	n.s.
	あてはまらない	7	16		8	15	
③嫌いな科目の勉強も一生懸命する	あてはまる	27	55	n.s.	34	48	n.s.
	あてはまらない	7	8		8	7	
④家族に言われなくても、自分から進んで勉強する	あてはまる	31	59	※1	40	50	※1
	あてはまらない	3	4	n.s.	2	5	n.s.
⑤予習をしてから授業を受ける	あてはまる	9	26	n.s.	14	21	n.s.
	あてはまらない	25	37		28	34	
⑥授業で習ったことはその日のうちに復習する	あてはまる	16	37	n.s.	22	31	n.s.
	あてはまらない	18	26		20	24	
⑦テストで間違えた問題をやり直す	あてはまる	27	55	n.s.	37	45	n.s.
	あてはまらない	7	8		5	10	
⑧机に向かったらすぐに勉強にとりかかる	あてはまる	20	46	n.s.	28	38	n.s.
	あてはまらない	14	17		14	17	
⑨計画を立てて勉強する	あてはまる	27	41	n.s.	31	37	n.s.
	あてはまらない	7	22		11	18	
⑩効果的な勉強の仕方を工夫する	あてはまる	27	45	n.s.	33	39	n.s.
	あてはまらない	7	18		9	16	
⑪ラジオやテレビをつけっぱなしで勉強する	あてはまる	19	31	n.s.	27	23	※3
	あてはまらない	15	32		15	32	
⑫携帯電話やスマートフォンを手元に置いたまま勉強する	あてはまる	32	45	※2	36	41	n.s.
	あてはまらない	2	18		6	14	
⑬携帯電話やスマートフォンが気になって集中できない	あてはまる	15	27	n.s.	17	25	n.s.
	あてはまらない	19	36		25	30	
⑭自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる	あてはまる	30	58	※1	40	48	※1
	あてはまらない	4	5	n.s.	2	7	n.s.
⑮「勉強は学校だけですればいい」と思う	あてはまる	6	6	n.s.	5	7	n.s.
	あてはまらない	28	57		37	48	

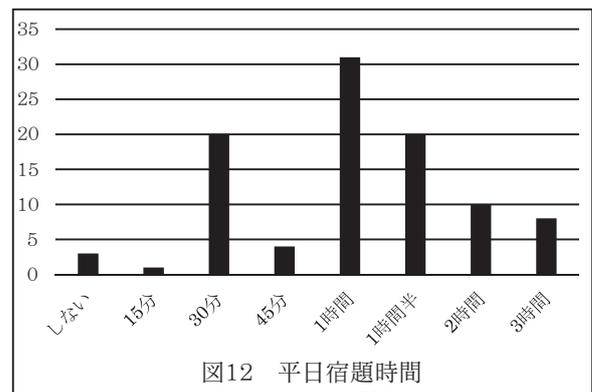
※1 フィッシャー正確確率検定

※2 $p<0.01$ フィッシャー正確確率検定※3 χ^2 検定 $p<0.05$

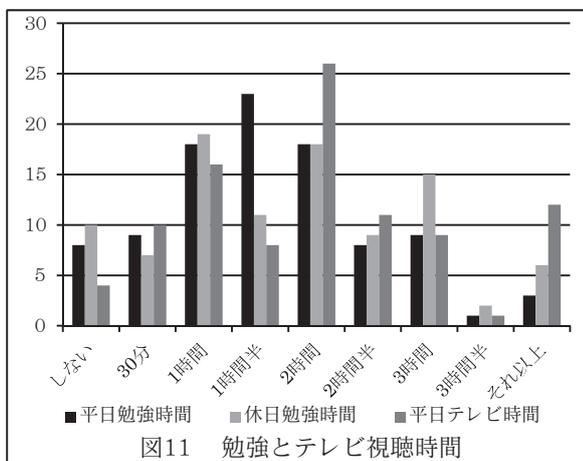


(7) 家での学習に費やす時間とテレビ視聴時間（スマートフォンでの動画視聴を含む）を尋ねた。平日の平均学習時間は1.60時間であり、そのうち宿題や課題に費やす時間の平均は1.22時間であった。また休日の学習時間は1.79時間で、平日との差はあまりなかった。

一方平日のテレビ視聴時間は1.97時間であり、学習時間を上回る結果となった。平日学習時間が3時間を超える学生が13名(13.4%)に対し、平日テレビ視聴時間が3時間を超える学生は22名(22.7%)と多かった。4時間以上と回答した学生も12名(12.4%)おり、帰宅後のほとんどの時間をテレビ視聴（現代においてはスマートフォンでの動画視聴が主であると思われる）に使っている実態が明らかになった。



を行った。「平日宿題時間」と「人体成績」に有意差が認められたが($\chi^2=7.589$, $p=0.00587$)、それ以外の項目では有意な差はなかった。



平日勉強時間、平日宿題時間、休日勉強時間、平日テレビ視聴時間それぞれの平均値より多い群と少ない群に分け、人体成績と学力テスト成績とで検定

表5 勉強時間とテレビ視聴時間

	人体				学力テスト		
	多い 少ない	高い	低い	有意差	高い	低い	有意差
平日勉強時間	多い	12	27	n.s.	17	22	n.s.
	少ない	22	36		25	33	
平日宿題時間	多い	7	31	※1	12	26	n.s.
	少ない	27	32		30	29	
休日勉強時間	多い	16	34	n.s.	19	31	n.s.
	少ない	18	29		23	24	
平日テレビ視聴時間	多い	19	40	n.s.	24	35	n.s.
	少ない	15	23		18	20	

※1 p<0.01

V. 考察

1. 看護職への興味・関心・意欲について

看護職に興味を持った時期で最も多かったのは小学生であった。これは、現在の学生は小学校ということが影響していると思われる。また、学生との面接でよく聞かれるのは、自分の幼い頃の入院体験から看護師に憧れを抱くケースであり、自身の体験の影響もあると考える。次いで多かった高校2年は文系もしくは理系かで科目選択をする時期である。最近では高校入学直後から進路についての授業があり、1学期の進路相談会などに参加すると、高1～2生の参加が増えている印象である。次に多かった中学2年生は、カリキュラムの中で職業体験が組まれている時期である。生徒たちは自分の興味ある分野を調べ、職場体験を通して働くことやキャリア形成について学ぶ。中学・高校での職業選択に関する取り組みが、学生の進路選択に一定の影響を与えていることが推測される。また、91.7%の学生が看護師として働きたいと「強く」「まずまず強く」思っていると答えている。日ごろ大変だ、難しいと言いつつも将来に対して明確な目標を持って学習していることを忘れてはならないと感じた。

2. 家での学習状況について

1) 家で学習する頻度では、週に半分以下の学生が5割を超えた。それでも「入学前より増加している」の回答が74.2%あることから、もともと毎日学習する習慣がない学生が大半であると推測できる。入学前の学習サポートで月に1回登校するたびに、毎日学習する習慣をつけようと説明しているが、この働きかけだけでは実現させるのはなかなか難しいという現状が明らかになった。

2) 学校からの宿題・課題の状況では、どの項目も

週4回以上行くと回答したのは1割程度だった。寺崎によると高校生の「学習時間の増加分の多くは宿題が担っている」という。つまり「宿題を課し家庭学習の時間を強制的に作り出すことで、家庭学習を習慣づけようとする取り組み」⁷⁾を行う高校で学んできた学生にとって、現在の宿題・課題の量は不足していると推測できる。また、宿題・課題として作文や小論文は「ほとんどしない」の回答が多い。2～3年次の実習記録において、「文章が書けない」、「状況を正しく記述できない」という教員の声をよく聞く。ならば、1～2年次から文章を書く宿題・課題を増やし、意図的な文章を書く訓練を行う必要があると考える。

また、平日の学習時間と宿題時間を見ても、20分程度の差しかなかった。これは、平日の学習時間のほとんどが宿題・課題を行うことに使われており、主体的な学びの時間はほとんどないことがうかがえる。平日の学習時間がテレビ視聴時間を上回った状況を見ても、宿題・課題が出されなければ勉強しない、という傾向が明らかになった。これは、高校までの学習習慣に大きく影響されていると推測できる。

3) テスト勉強開始時期、4) 家での勉強の仕方、5) 学習方法のタイプ、6) 家での勉強の様子の中で特に有意な差があった項目について考察する。

まず、当学科の学生に多い学習タイプのうち着目すべきは、「できるだけ暗記しようとする」、「易しい問題を数多く解く」である。寺崎によるとこれらの学習方法は「偏差値の低い学校の生徒が行って」おり、これらの高校では「反復練習、暗記中心の学習がより多く採用され、～中略～基礎学力の定着が目指されている」⁸⁾という。また、99%の学生が「復習中心」と回答したことも特徴的である。「予習

中心」の学習方法が「偏差値 55 以上の高校だけに顕著にみられる学習方法であり、～中略～結果として、予習するという習慣が偏差値 45 未満、偏差値 45 以上 50 未満の高校から奪われた」⁹⁾ のだとすると、予習の重要性をいかに説いたところで、そもそも予習の方法を知らない学生が多数派であろう当学科においては、まずその方法から指導しなければならないということになる。

また、③参考書を読む、④辞書を引く、⑤図鑑や事典で調べるという勉強の仕方が少ないのもうなずける。これらは、自ら調べる、考えるという学習タイプに必要な方法である。「わからないところは自分で考える」より「先生や友達に聞く」学生は、自分で学習内容を理解するための方法がそもそもわかっていない可能性がある。そうすると、⑥教科書や参考書を整理して自分のノートを作る、と学力テストの関係で有意な差があったのも納得できる。自分ノートを作ると回答した 70 名のうち、学力テストの成績が高い者の割合が 37.1%であった。逆にしないと回答した 27 名のうち成績の高いものは 59.3%であり、ノートを作るという勉強の仕方が学力テストの成績向上につながっていないことが明らかである。学力テスト後の振り返り学習では、問題の解説をテキストから探し出し、要旨をまとめ記述するよう指導している。しかし、成績下位の学生では「要旨をまとめる」ことができず、テキストを丸写しにしてしまうタイプが多いと感じている。丸写しにする労力がかかる割に結果に結びつかない状況が見て取れる。

①テキストを繰り返し読む、②アンダーラインやカラーマーカーを引く、⑦プリントを繰り返しやるなどの勉強の仕方は、高校での学習方法がそのまま続いていると推測できる。短期大学入学後に求められる学習は、反復練習や暗記中心の学習ではなく、自ら考え理解を深める学習である。しかし実際には「生徒の学力レベルによって内容は質的に異なって」いても「同じ時間家庭学習をすることで『学習をした』という達成感や満足感」¹⁰⁾ を感じて当学科に入学してきた学生は、新たな学習方法を知るチャンスがないまま専門的な知識をひたすら詰め込まれる状況に直面している。冬木らによると「学生に不足している能力は『文章作成能力』、『プレゼンテーション能力』、『論理的思考力・問題発見解決力』である」という¹¹⁾。これらの力をつけるために、まず「講義のポイントをまとめる力」や「ノートの取り方」、「意見と事実を分けて書く力」、「文献や資料の読解力」など¹²⁾ をつけるための支援が必要である。

現在の高校生には「生徒の学力レベルに合わせた学習方法が選択されることで、生徒に必要な以上の焦

燥感や疲労感を抱かせない、新しい『受験競争時代』プレッシャー」¹³⁾ が成り立っているという。今回の結果からは「多様な学び方の経験が少ない者にとっては混乱が推測される」¹⁴⁾ その現実が垣間見えた。「受動的な学習スタイルを否定することなく、むしろそれを活かして、」¹⁵⁾ いく必要性を痛感した。当学科の場合は①宿題をきちんとやる、④自分から進んで勉強する、⑭興味のあることを学校の勉強と関係なく調べるなどが強みといえよう。また⑭については「高校生については、～中略～ICT メディアを使った勉強が『楽しい』、『勉強の効率が上がる』と感じている」¹⁶⁾ を考えると、NHK エデュケーショナルの高校講座の活用や e-learning の活用も視野に入れ検討する必要があるだろう。

VI. 結論

今回の研究により以下の学習実態が明らかになった。

1. 家で学習する頻度は週に半分以下の学生が多く、そのほとんどが宿題・課題を行うことに使われている。
2. 当学科の学生に多い学習タイプは「できるだけ暗記しようとする」、「易しい問題を数多く解く」、「復習中心」である。
3. 勉強の仕方で多いのは、「テキストを繰り返し読む」、「アンダーラインを引く」、「プリントを繰り返しやる」であり、「参考書を読む」、「辞書を引く」、「図鑑や事典で調べる」は少ない。

VII. 今後の課題

今回の研究では、学習実態は明らかになったものの、影響要因を掘り下げるまでには至らなかった。入学生の背景をできるだけ早期に把握し、学生個々の能力に見合った初年次教育を充実させる必要性を感じている。

VIII. 引用文献

- 1) 旺文社 教育情報センター 26 年 1 月,
http://eic.obunsha.co.jp/resource/pdf/educational_info/2014/0107.pdf
- 2) 文部科学省 看護師・准看護師養成施設・入学定員年次別推移一覧
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2017/03/01/1314031_03.pdf
- 3) 耳塚寛明, 学習基本調査の結果から見えること, ベネッセ教育総合研究所, 研究所報 VOL.40, 第 4 回学習基本調査・国内調査報告書・高校生版,

- 14-19, 2007.
- 4) 教育改革 ing 入学前教育, Guideline September 2008,
www.keinet.ne.jp/gl/08/09/kaikaku.pdf
 - 5) 香澤系, 第5回学習基本調査, Chapter 2 家庭での学習, 第1節, 68-71, 2015.
<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.phpid=4801>
 - 6) 寺崎里水, 新しい“受験競争の時代”の到来, 32-42, 2015.
http://berd.benesse.jp/up_images/research/05_chp0_3.pdf
 - 7) 前掲書 6)p33.
 - 8) 前掲書 6) p 38.
 - 9) 前掲書 6)p42.
 - 10) 前掲書 6)p41.
 - 11) 冬木佳代子, 峰村淳子, 看護専門学校における, 新入生に対する準備教育の必要性と内容の検討, 東京医科大学看護専門学校紀要, 第22巻第1号, p29, 2012.
 - 12) 前掲書 11)
 - 13) 前掲書 6)p42.
 - 14) 林世津子他, 東京医療保健大学医療保健学部看護学科における入学前教育プログラムの効果, 東京医療保健大学紀要, 第1号, 23-28, 2015.
 - 15) 前掲書 14)
 - 16) 前掲書 5) 第9節,
- 岩波新書, 2001.
- 9) 原田曜平「さとり世代 –盗んだバイクで走り出さない若者たち」角川 one テーマ 21, 2013.
 - 10) 仲本正夫「自立への挑戦 –本物の学力とは何か」労働旬報社, 1982.
 - 11) 全国大学高専教職員組合「大学崩壊 –国立大学に未来はあるか」旬報社, 2009.
 - 12) 齋藤孝「まねる力 模倣こそが創造である」朝日新書, 2017.
 - 13) 「徹底討論 大学入試改革」中央公論, 2018年2月号.

参考文献

- 1) 全入時代にかわる大学 - 国際的「学士力」を問う -, 産経新聞デジタル版
<http://www.sankei.co.jp/ad/daigaku-tokusyuu/>
- 2) 石井秀宗他, 大学教員における学生の学力低下意識に影響する諸要因についての検討, 行動計量学, 第34巻第1号, 67-77, 2007.
- 3) 看護職員の現状と推移, 第1回看護職員需給見通しに関する検討会資料,
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000072897.html>
- 4) 久司一葉, 看護専門学校生の多様化と初年次教育, 佛教大学大学院紀要, 教育学研究篇, 第39号, 2011.
- 5) 中村恵子他, 看護学生の初年次教育におけるロールプレイングを用いた話の聞き方指導の成果と課題, 新潟青陵学会誌, 第7巻第3号, 13-24, 2015.
- 6) 溝上真一「どんな高校生が大学、社会で成長するのか」学事出版, 2015.
- 7) 中内敏夫「学力とは何か」岩波新書, 1983.
- 8) 戸瀬信之, 西村和雄「大学生の学力を診断する」